

植物の地下茎・教会共同体

主任司祭 小池亮太

東京教区の小教区のミサは、新型コロナウイルス感染症の拡大により、灰の水曜日の翌日から中止されました。教会が目に見えるようになるのは、信者が集まり、ミサを祝う時ですから、「ミサが無くなった」ということは、「教会が目に見えなくなった」ことを意味します。

植物には、〈地下茎〉と呼ばれる茎を、地面の下で伸ばすものがあります。この〈地下茎〉にはいくつかの利点があります。

茎が地中にあると外気に晒されないので、暑さや寒さ、乾燥に耐えやすくなります。このように、外的な影響を受けにくいので、〈地下茎〉は養分を蓄えるのに適しています。例えば、サツマイモは〈根〉が太くなったのですが、ジャガイモは太くなった〈地下茎〉です。

また、〈地下茎〉を持つ植物は、人が取り除こうとして除草剤を撒いても、地上に出ている部分は枯れても、地下にあって除草剤のかからない茎は枯れることがあります。そして、目で見ることができない地面の下で〈地下茎〉が伸びて広がっていくので、人の思いもしない

所から芽を出します。

それだけでなく、人が地面を掘り起こして完全に切り除いたと思っても、〈地下茎〉が少しでも残っていたら、それは根を伸ばし、芽を出して新しい株になります。ですから、人の役に立たない〈地下茎〉を持つ植物は「抜いても抜いても、どこからか生えてきて、広がって増えていく、厄介で困った『雑草』と呼ばれます。

世界中に広がるカトリック教会も、〈地下茎〉を持つ植物のようです。イエス・キリストを信じる人たちの共同体である教会は、その始まりの時から厄介で困った存在と見なされて迫害や弾圧を受けてきました。しかし、教会共同体は絶えることはありませんでした。

日本においても、禁教令が出されて聖堂は破壊され、宣教師や司祭は国外に追放されてミサを祝えなくなりました。また、信者は棄教させるための拷問を受け、信仰を捨てない者は見せしめのために殺されました。こうして、キリスト教は根絶やしにされたと思われていました。しかし、二百年以上もの間、人の目を避けて信者の共同体は存続し、「信徒発見」という

出来事によって、教会は再び日本の地に姿を現したのです。

世界中を痛めつけているコロナウイルスによって、東京教区の教会は三ヶ月以上もミサを祝うことができなくなりました。聖堂に集まれないことで教会の姿は見えなくなり、共同体の心の繋がりも引き裂かれ、その隙間に無力感や苛立ちが入り込もうとしています。それでも、再び聖堂に集まって喜びのうちミサを祝うことができ

た時、教会は姿を現します。コロナウイルスは絶滅せず、感染症の流行は波のようにやって来て、ミサに集まることのできなくなる時がこれからもあるでしょう。それでも、〈地下茎〉を持つ植物のような教会は、決して絶えたりはしないし、見えなくなっている間も信仰を蓄えて根を張り、新芽のように思いもしなかった場所から姿を現して、花が咲くように世界に希望をもたらすことができます。ミサが無く、人もほとんど訪ねて来ない静かな教会の前庭で、地下茎によって昨年よりもぐんと増えて、青空の下で綺麗に咲き誇るモナルダを眺めながら、このようなことを考えていたのです。